

【本編】

幸福な忘却〜没落令嬢が二人の好事家に調教され、生きた調度品になるまで〜

【小話集】

- ・従順なる黒鳥（メイド・オブ・サイレンス）
- ・罪深き白兔（バニー・オブ・プロフェーン）
- ・永遠の揺り籠（ベイビー・イン・クリスタル）
- ・背徳の聖母（プロフェーン・シスター）
- ・ゼンマイ仕掛けの愛娘（クロックワーク・ドール）

【本編後日談】

ヴァランシエール邸は、もはや死者の住処のような静寂に包まれていた。

かつては贅を尽くした調度品が並んでいた場所も、今は競売の目印である赤い札が、剥製に刺されたピンのようにあちこちに貼り付けられている。

リリア・ド・ヴァランシエールは、埃の舞う部屋の隅で、鏡の中に映る自分を見つめていた。着古した、けれど手入れだけは行き届いたシルクのドレス。没落したとはいえ、彼女の肌は相変わらず白磁のように滑らかで、その瞳は悲劇を予感させるように潤んでいる。

「……リリア。……聞こえているのか、リリア」

背後から疲れ切った父の声がした。かつては威厳に満ちていたその声も、今は債権者たちの罵声に削られ見る影もない。

「……来週にはこの屋敷も明け渡さなければならぬ。……お前の行き先だが……。……ある蒐集家から話が来ている」

リリアは鏡を見つめたまま、微かに唇を震わせた。「行き先」という言葉の裏にある意味を、彼女は十分に理解していた。それは結婚でも、奉公でもない。……彼女という「美しき血統」そのものを、標本として買取りたいという、狂気じみた好事家への身売りだ。

「……その方は、……私を、……どうされるのですか？」

「……『大切に飾る』と言っている。……一生、何不自由ない暮らしを約束すると。……ただし、二度と表舞台に出ることは叶わない。……お前は、彼らの私的なコレクションの一部になるんだ」

大切に飾る。その言葉が、リリアの胸の中に、冷たい、けれど甘美な波紋を広げた。……飾られる。……そう、……私は、……もう人間でいることに疲れてしまった……。

没落してからの数ヶ月。リリアを待っていたのは借金の督促と、かつての友人たちからの冷笑、そして「女」としての価値を品定めする下卑た視線ばかりだった。

自分の意志で歩き、自分の意志で呼吸し、自分の意志で未来を選ぼうとするたび、現実 herself は彼女の心は無慈悲に踏みつけにした。

リリアは、鏡の中の自分の細い首筋に、そつと指を触れた。

……もし私がモノになれたなら。ふと、そんな空想が脳裏をよぎる。

モノになればもう誰も私を責めない。明日の心配もしなくていい。ただ美しく磨かれ、主人の望むポーズで静止していれば、それだけで「愛される価値」が生まれる。

「……お父様。……そのお話お受けいたします」

「リリア……っ。……すまない、……情けない父を許してくれ……」

父が泣きながら部屋を去った後、リリアは再び鏡に向き直った。

彼女は引き出しから、最後のひとつとなった宝物——母親の形見の、重厚な真珠のチョーカーを取り出した。それを自分の首に、苦しいほどきつく巻き付ける。

「……あ、……う……」

物理的な圧迫感が、喉を締め上げる。呼吸が浅くなり、視界がわずかに歪む。けれど、その苦しさ、リリアにとっては不思議なほどの「安らぎ」をもたらした。

「……そうだわ。私はこうして縛られていたい。……誰かに、……『君は動かなくていい』と、……言ってもらいたい。……」

彼女はそのまま、図書室の中央にある大きな椅子に、背筋をピンと伸ばして座り込んだ。両手を膝の上に置き、顎を上げ、瞬きひとつせずに、虚空を見つめる。

身体が強張り、関節が痛み始める。けれど、その痛みこそが、自分が「静止している」という確かな証拠だった。

(……私は、……お人形。……ヴァランシエール家の、……最後の装飾品……)

脳内でおまじないのように繰り返す。

すると、あんなに恐ろしかった未来が、まるで宝石箱の中に閉じ込められるような、甘やかで安全な場所に見えてきた。

「……早く私を壊して」

リリアは、まだ誰もいない部屋で、未来の主人たちへ向けて、言葉にならない祈りを捧げた。

森の冷気は、リリアの薄い外套を容易く通り抜け、その白磁の肌を容赦なく刺した。馬車は、森の入り口で彼女を降ろすと、逃げるように走り去っていった。残されたのは、深い霧と、その奥にそびえ立つ巨大な鉄の門。そして、たった一人の没落令嬢だけだった。

リリアは震える肩を抱きしめた。手に持った小さなカバンには、最低限の着替えさえ入っていない。そこにあるのは、かつての自分を証明する書類と、二人の好事家——ヴィクトールとカインから届けられた、一通の招待状（契約書）だけだ。

『君のすべてを、永遠の静寂に捧げる用意があるならば、この門を叩け』

リリアは、門の手前で立ち止まり、夜の森の匂いを胸いっぱい吸い込んだ。これが、自分の意志で吸う、最後の空気。これからあの門を潜れば、呼吸さえも「管理」されることになる。自分の肺がどれほど膨らむかさえ、他人に決められる「モノ」になるのだ。

「……………ふう……………っ」

吐き出した息が、白く霧に溶けていく。リリアは自分の脚を見つめた。細い、けれどまだ自分の意志で一步を踏み出せる脚。……………けれど、その自由が、今の彼女には何よりも重荷だった。歩きたくない。どこにも行きたくない。ただ、誰かに抱え上げられ、台座の上に設置され、「君はそこにいればいい」と言われたい。

(……………怖い。……………でも、……………楽しみなの。……………お名前も、……………恥ずかしい思い出も、……………全部、門の向こうに、……………捨ててしまえるなら)

彼女は、カバンの中から一粒のキャラメルを取り出し、口に含んだ。これが、自分の意志で選ぶ最後の「味」になるかもしれない。キャラメルが溶けていく。甘さが消えていく。

それと同時に、リリアの中で「人間」としての芯が、音を立てて崩れていった。

「……さようなら、リリア・ド・ヴァランシエール」

彼女は空になったキャラメルの包み紙を、霧の底へと落とした。それは彼女が「自分」という存在を捨てた、最初の手向けだった。リリアは最後にもう一度だけ、深く、深く深呼吸をした。肺の隅々まで、冷たく自由な空気を満たし、それをゆっくりと、未練を断ち切るように吐き出す。

そして、一度も振り返ることなく、鉄の門扉へと手を伸ばした。冷たい金属の感触。

それは、これから彼女を永遠に縛り付ける、美しき枷の予感。

「……お迎えに、ありがとうございました。……ご主人様」

リリアが門を叩いたその瞬間、森の静寂が破られた。

館の中は、驚くほど静謐だった。廊下の壁には、精巧な自動人形（オートマタ）たちが飾られ、彼女を物言わぬ瞳で見つめている。

案内された広間の奥で二人の男が待っていた。

「いらっしやい、リリア。待ちわびていたよ。君という至高の素材が、自らここへ歩んでくるのを」

銀縁の眼鏡をかけ、完璧な三つ揃いのスーツを纏った男——ヴィクトールが、温度のない微笑みを湛えて立ち上がる。

その隣、長椅子にだらしく身体を預け、赤い葡萄酒を揺らしているのがカイン。彼は、獲物を値踏みするような、無邪気で残酷な瞳を彼女に向けた。

「あはは！本物だ、ヴィクトール！噂通りの綺麗な肌……。ねえ、君がリリア？自分の足で歩くのは、今日が最後だって分かっててここに来たんだよね？」

リリアは、震える膝を隠すようにドレスの裾を強く握りしめた。けれど、その瞳にはもう迷いはない。

「……はい。……私をモノにしてください。もう、何も考えたくない。……ただ飾られて、愛されるだけの……人形に」

その言葉を聞いた瞬間、ヴィクトールの瞳が冷徹な審美家のそれへと変わった。

「……いい覚悟だ。ならば、契約の儀式を始めよう。君の身体から『人間』を脱ぎ捨てさせなければならぬ」

ヴィクトールの合図で、リリアは部屋の中央に置かれた、冷たい大理石の台の上に乗せられた。

二人の主人が、彼女を挟むように立つ。

「まずは、この無駄な外装（ドレス）を捨てようか」

カインの手が、リリアの背中ファスナーに触れる。昨日まで、彼女を守る鎧だった絹のドレスが、カインの荒々しい手つきで引き裂かれ、床に落ちた。肌寒い夜気にさらされ、リリアの白い肌が粟立つ。

「……っ、あ……」

「恥ずかしがる必要はないよ。君はもう、恥を知る『女性』ではなく、これから磨き上げられる『素体』なんだから」

ヴィクトールが、冷たい手袋をはめた指で、リリアの顎を掬い上げた。

全裸となったリリア。その姿は、あまりにも脆く、そして美しい。

「……まずは、姿勢（ポーズ）の基礎を整えよう。リリア、君の立ち方は美しすぎる。意志が

籠りすぎているんだ」

ヴィクトールが用意したのは、銀色に光る、首から腰、そして手足の関節を強制的に固定するための『第一拘束具』だった。

ひんやりとした金属が、リアの柔らかな肌を締め付ける。

「動いてはいけない。君の役割は、僕たちの美学を完璧に体现することだ。呼吸を整えなさい。僕の決めた角度、僕の決めた高さ……それ以外に意味はない」

ヴィクトールは、リアの背筋を不自然なまでに反らせ、顎を高く上げさせた状態で、首輪のネジを固定した。

自らの意思では、もう下を向くことさえ叶わない。

「次はボクの番だね！」

カインが笑いながら、大きなトレイを運んできた。そこには、世界中の贅を尽くした、けれ

ど異常なまでに重厚な宝石や真珠が並んでいる。

「お人形さんは、綺麗じゃないとね。ほら、この真珠のネックレス……リリアの細い首が折れそうになるくらい、たっぷり巻いてあげる」

カインの手によって、数連、数十連もの真珠がリリアの首にかけられた。数キロの重量が、首輪で固定された彼女の首に容赦なくのしかかる。

「あはは！ 逃げられないように、重く、重くしてあげるんだよ。君はもう、自分の力で歩も動けない。……ほら、足首にもこの『黄金の重り（アंकレット）』を」

カインがリリアの足首に重厚なリングを嵌めると、彼女はもはや、自分の足でバランスを保つことさえ困難になった。

全裸に、首輪と重い真珠、そして足枷。立っているのが精一杯の、無力な「飾り」。

「……いい眺めだ。……さて、リリア。最後の、そして最も重要な契約を交わそう」

ヴィクトールが、彼女の唇に指を当てた。

「君の『ナカ』も、僕たちの色で染め上げなければならない。……君の知性を溶かし、僕たちなしでは快感さえ得られない、空っぽの器にするために」

ヴィクトールがリアアの脚を左右に開かせ、台の縁に座らせる。彼女の「聖域」が、二人の主人の視線にさらされた。

「……あ、……んんっ!!（はずかしい、……でも、……なにかが、……なかが、疼いて……っ!!）」

ヴィクトールが、温められた粘度の高い「お掃除液」を、シリンジで彼女のナカへゆつくりと流し込んでいく。

「……ひ、……あ、……ああっ!! ……なかが、……熱い、……なにか、……はいつて、きます……っ!!」

「君の汚れを、僕たちの愛で洗い流すんだ。……ほら、こんなにパンパンに張っている」

お腹が不自然に膨らみ、リリアは内側からの重量感に支配される。そこに追い打ちをかけるように、カインが彼女のナカへ、激しく振動するクリスタル・プラグを差し込んだ。

「……ひ、……あざいいい！！♡ ……しんどう、が……脳みそまで、……ひびいて……
っ！！」

「あはは！これが『お人形の心臓』だよ！ほら、最後はこれでお口に栓をしなきゃね」
カインは、白磁の球がついたビットギヤグを、リリアの口に深く嵌め込んだ。

「……んん、……んんーっ！！♡」

言葉を奪われ、首を固定され、重い宝石に押しつぶされ、ナカは激しい振動と重みで満たされている。ヴィクトールが潤んだ瞳を覗き込む。

「……おめでとう、リリア。今、この瞬間、君は人間を辞め、僕たちの『ドールハウス』の住

人になった」

カインが、リリアの頭を優しく、けれど乱暴に「よしよし」と撫で回す。

「……いい子だねえ。……これからは、何も考えなくていいんだよ。……苦しいのも、熱いのも、全部ボクたちが『管理』してあげるからね……♡」

リリアは、激しく震えるナカの刺激に翻弄されながら、お口の球を「ちゅうう……」と吸い込んだ。

難しい言葉も、没落の悲しみも、ピンク色の霧の中に消えていく。目の前にいる、自分をモノとして愛でってくれる二人の神様。

中
略

「おはよう、リリア。……さあ、今日の君は誰になろうか」

ヴィクトールが、巨大なワードローブの扉を開く。そこには、数えきれないほどの「属性」が並んでいた。清廉なシスター、不道德なバニー、従順なメイド。

リリアは、主人の指先が衣装を選ぶのを、おしゃぶりを咥えたまま虚ろな瞳で見つめていた。もはや彼女に「自分はこうありたい」という意志はない。ただ、着せられた服に合わせて、自分の「中身」を書き換えてもらうのを待つだけの、空っぽな器だった。

「今日はこれにしよう。……清らかなシスター。……君の罪深いナカを、祈りと快感で浄化してあげるよ」

ヴィクトールが選んだのは、目も眩むような純白の修道服だった。しかし、それは本来の修道服とは程遠い。肌を透かすほどに薄い絹。胸元は大胆にくり抜かれ、下半身は前後の布が分かれた、主人の「診察」をいつでも受け入れられる不潔な構造をしていた。

「……あ、……し、……シスター……？……わたし、……いい子に、……おいのり、……するの……っ♡」

リリアの腕がヴィクトールの手によって高く上げられ、関節が衣装の裏に仕込まれたバネによって、祈りのポーズで固定される。

ヴィクトールは、リリアの頭にベールを被せると、彼女の首を再び、高い銀の十字架がついたチョーカーで締め上げた。

「……いいかい、リリア。シスターは、声を上げてはいけない。……ナカがどれほど熱くても、顔だけは清らかに、主人の愛を享受しなさい。……それが、今日の君の『定義』だ」

「あはは！ 聖職者の格好をしてるのに、ナカはボクたちの『熱』でパンパンなんて、最高にエッチだよ、リリア！」

カインが乱暴に、リリアの修道服の裾を捲り上げた。昨夜の「密閉プラグ」が引き抜かれる。

リリアの身体がガクガクと震え、ベールの下で瞳が白濁した。

「……んん、……んんあああああっ!!♡」

「ほら、シスター。我慢しなきゃ。……祈りの時間だよ」

カインが用意したのは、シスターの属性に合わせた「聖なるお掃除棒」。それは、彼女の力を激しく叩き、浄化（絶頂）させるための、冷たくて太い銀のデバイスだった。

ヴィクトールが彼女の腰を背後から固定し、カインが正面から、彼女の「祈り」を蹂躪し始める。

一時間後。ヴィクトールが「次はこれだ」と声をかける。

シスターの衣装は脱ぎ捨てられ、次は、黒いエナメルが光る「バニーガール」の衣装が彼女の肉体を締め付けた。

「……びょん、……びょん。……わたし、……うさぎさん、……なの……っ♡」

衣装が変わるたび、リリアの口調が、そして意識が、その属性に引きずられて変質していく。シスターのときは「お祈り」を、バニーのときは「交尾」を。ヴィクトールによる論理的な「役割の刷り込み」と、カインによる「属性に合わせた玩具」の変更。

その果てしないループの中で、リリアの「リリア」としての自意識は、完全に削り取られ、剥離していった。

(……わたし、……なに着ても……おんなじ。……なにをされても……しあわせ……。……ただの、……おきがえ、……おにんぎょう……。っ!!♡)

「……いい。……実にいい。……属性を奪い、器だけを残す。……これこそが、僕たちのドルハウスの完成形だ」

ヴィクトールは、満足げに彼女を眺めた。リリアの脳内は、いまやパステルピンクのノイズで埋め尽くされている。メイド服を着せられれば「お掃除」をせがみ、ナース服を着せられ

ば「お注射」を求めて震える。

もはや「羞恥」という言葉は、彼女の辞書から消え去っていた。

「あはは！最後はこれだね。……リリア、君の本当の姿。……全裸の赤ちゃんだよ……」

カインが、全ての衣装を脱ぎ捨てさせ、リリアに巨大なパフのついた、真っ白な「うさぎ柄のパンツ」を当てがった。

お口には、ピンク色に淡く発光する特製の「絶頂おしゃぶり」。

首には、もう外れることのない、主人の名が刻まれた真珠の首輪。

「……っ！！♡♡♡」

リリアの瞳から、ついに知性の光が完全に消失した。おしゃぶりを強く吸い込むたびに、ナカに挿入されたうさぎさんデバイスが「キュルルン♡」と過去最大の音で共鳴する。

彼女はもう、難しい言葉も、自分の名前も、昨日の記憶も、すべてを「幸福な忘却」の彼方

へと投げ捨てた。

「……リリア、ではないね。……今日から君は、僕たちの『小さな愛玩具』だ」

ヴィクトールが、うさぎ柄のパンツ姿で膝立ちになり、おしゃぶりを無心に吸うリリアの頭を優しく「よしよし」と撫でる。

カインが、彼女のパンパンに張ったお腹を「ぼん、ぼん」と叩く。

「……んん、……んう、……んっ!!♡」

お腹に響く衝撃が、ナカの共鳴を誘い、リリアは言葉にならない甘い声を漏らしながら、再び、絶頂の多幸感へと吞まれていく。

衣装を脱ぎ捨て、属性を剥ぎ取られた先に残ったのは、ただ主人の愛（快感）に反応するた
めだけに存在する、究極の「無知」という名の完成品だった。

中
略

「おはよう、僕たちのかわいい、小さな赤ちゃん」

ヴィクトールが、温かなミルクの入った哺乳瓶を手に、ベッドサイドに現れた。

リリアは彼を見て、何事か話そうとした。……自分はリリア・ド・ヴァランシエールである。自分はなぜここにいるのか。

だが、喉から漏れ出たのは、意味をなさない湿った音だけだった。

「……ふえ、……あう……んんう……♡」

「いい子だ。……言葉なんて、君にはもう必要ないんだよ。……難しいことを考える脳は、昨夜の絶頂で全部溶けてしまったからね」

ヴィクトールが、お口に嵌められていたビットギャグをそと外した。

自由になったはずの彼女の唇。だが、リリアは何かを喋る代わりに、反射的にヴィクトールの指を「ちゅうう……」と吸い込んだ。知性を失った彼女の生存本能が主人の温もりを「乳首」

として求めていた。

「あはは！ 見てよ、ヴィクトール！ リリア、本当に赤ちゃんになっちゃったんだ！！ ほら、今日のボクからのプレゼントだよ」

カインが、ベッドの上に色とりどりの「知育玩具（という名の電気玩具）」を並べた。

そして、リリアの顔を覗き込み、彼女のお口に特製の「絶頂おしゃぶり」を深く押し込んだ。

「……ん、……んんーっ！！♡」

それを吸うたびに、ナカに深くパッキングされたうさぎさんが、リリアの脊髄を直接揺さぶるような甘い共鳴を上げる。

おしゃぶりを吸うという、赤ちゃんの最も原始的な動作が、彼女にとっては「絶頂へのトリガー」へと書き換えられていた。

「さあ、お食事の時間だよ。……リリア、お口ではなく、君の『下の口』に、今日の分の栄養

をたっぷり注ぎ込んであげよう」

ヴィクトールとカインが、リリアのうさぎ柄のパンツを優しく脱がせた。昨夜の永久密閉ブラグが、二人の手によって慎重に引き抜かれる。

「……ひ、……ひいいいっ!!♡」

密閉されていた熱い質量が溢れ出し、リリアの身体が幼児のように激しく跳ねた。空っぽになった喪失感に、彼女は「あう、あう……!!」と、おしゃぶりを震わせて泣きじゃくる。

「泣かないで、いい子だね。……ほら、新しい『離乳食』だよ。……君がずっと僕たちのモノでいられるように、特別な魔法を込めてあるんだ」